へ13
2941

□理捷五編

遠理は捷径編の序
嘘んめくやに仁へ名鳥が毒は梅の実ぐ白
伊勢の書目が滑稽なれり。其花びらは
数まくらぶ。喜橋して青面。理は毒。
袖はよりして壌は浅し。漸く洗ひて
見えけり。雨花ならくて宵は比留ぬ。

へ13
2941
門 へ 13
2941
流巻
昭和九年七月九日
購求
9-7-9

意馬心猿のまい様

三世岸川曲之助

夫木集

再出お梅

高利貸強六

三出
おきく

三出
おそで
三出
二ノ部

春色連理梅 巻之十三

第廿五齣

梅暮里谷峩作

本編 書房 同刻

悪そんでびんぼうの中を父母が養育ぐろうの善悪やもろもろ
の由もなきあぐらの又か仕やうもありねとべ。そも身くのん
うくみて。善も悪くも皆なりのり。世か賢人。そのこと
まるもも小人。匹夫と卑
るも。淫婦奴婦と綸らも
竟報次の約ひを慎ひしと慎まざるみてがく益き報もかく
て験。うこでも冥き報をかくるみ、ひりのり。そ信くの冥も
乱。お松そん報みて由そ、例がお業を口徴。そこ笑う

倫吹せつ。お松か答えて。送りをしても。まあして別を
悲ふ。お業のんをひるの。親取るみ。零れ去る涙の移
ろひ易き男等と。遠か男でうう悪しく。ふくも。その分
を傷ら社し。ふせ手しと娘等のせま乳納ゆる金
おまる。涙を吹よ泊ぎぐもをもうく。気か角等ぐんのうう
き。男か党者を直されも。しきさ分の杜陋のんとの
分でそ分を卑下して。恐ひ乃社そ至ることや
男そ気幼うう。ぶかり幼の願みく。角度の党の者人

とうぞその身は二世も三世もと。命を懸し男なく。宅の女子
に義理に縛されて。是ぎりに此身を捨しまでも。未練くどき無は
とあきらめてゐる。有繋忘れぬ女の情。發起しさし懸
しさるに胸へ惱亂瞋恚のたむらを。おさへて堪へて情よ
く顔へも出さぬ嫉妬なれバ。まだくるしかれぬお竜に
そ見しも由縁ある中ぞとも。思へば命りもきと聲
も悪さる房二郎の上をのく。んにかくれて是も又
お縁ともおかしもおが。互に膝を並べても手ぞ

時々は背中をして面白さうに手を組をつぶりて居るのを一お糸
さん松さんと人集りまして居る人に「ヤヤた様さ糸へ
どうか私どもへ見せて呉んせと申すると「それでも私
も此一郷に身まりまきまよト今僅おもしろき狂言中を。
見捨て両個共に中ては互に胸に一物あり。出入とても
に男なれバ。思ふ心を墨に縁ど。ひとりは他人を忘
ぶ恋ひとりは嬉し女房なれども。まだ恋たる上の
せぬ中にて。彼川新兵の其内座。互に気の毒の縁

かゝる。娘と雀あり〳〵と出で。去だしも 雛がござなさの。ひそおかゝ娘と娘。お松を捜さそを舞うおて。お松いおまさが連約あるとべい寮行ちゃみ由うの。へ舎へうまいを約んとゐひ。お雪ゐ又房二ゑ寮が。奥の間ゐ在と笑だ。そこへ約んとゐふ狗を。ゑふ舞ふそを作うぢゐふ房ゐのゐ舞く〳〵。武ひそ厠へ。お松さんいまゥ舞ふ〳〵。武ひそ厠へ。お松さんいまゥ

でもしてお在のかやァでさなまゥ
ゐんでゐ 〳〵を一ナニお兄さんの而じ
ゐんとのさんゐ
ゐもまゐまゐせんトゐふ例のゐひへやおれでまゐ〳〵ちゐくゐ
の動静でもこふ舞うまゐ〳〵ゐ
そゐでてゐお嬢さ由ま女おゐひへお出ゐ在てゐ作あそで在
私しやァおふ舎へ舞て見まゐ
名雛菱ゐ放て帰ゐ〳〵まゐ
おこんゐ放よ名度松がおまゐ

お松

お勝

お客

梅「ヘそれでもお邪魔に御座りますとお亀の毒さうにでおざる
ましたもの トかゝうはまく〜それお亀はいんけんなたちゆゑこれもおかめのうれふるをみてうれしくおもふ顔をするとまくして 亀「ヲヤい
やなお梅さんだよ 左様ならお兄さんの方へ気がつくいえま
せう トゆきくかゝる 梅「イヽエ おとつしやまんしよそれよりかお亀に
おつかさんが案じまんしお園へいる入て伝兵衛さんが案じ トくすんなしやる 亀「アレ
まアいやな お梅さん私ア左様かんじやアござりませんかね
梅「ヘヽ、ソレ伝兵衛さんがましな私がどんなおん心ともすまし
も致しませんのに此月がくる愁がましいやいまゝゝ

にさツレあのいふに落ぶれるに落てとこやらにしやるま
さヨカアノ若いものして松もどうでも宜のさ、おざる
まだかへらか トはやし合れ侍ほら おお亀をみてとる立まつしよ 亀「へ
もういやおとなからお気がつけなんよいから私が
気がみてさいさへ中きましてお家をそお兄さんの所へ
[illegible]が気をつけてお供てかおしいよ トいはれて梅はそばへ[illegible]
り
ツク 梅「ヲヤ〜お嬢さまいまアかんな邪魔を[illegible]て落
よね[illegible]まんよ私しやアあの日見倒に泣てかくさ

ゐまをけるこゝろもなどゞくもあるものが窮屈
でなりませんもはやどうぞ殺して
をもはやとひぬ男ゐるわるこゝろ
戦ふでくく勝ぐーくくおく桑さんくくと引きうり去
およとおきるあをそうよ
き、方の二人を呼合せ
お縛さ縛へふくく約ておらん
うみ約むこの隣の周
お杉ありうる女を
ゐるくよそれゐ在そのうとをおおうけくて。
来くる悪党と自でありしまをを
るふそ式方の両個を合
そるそ女ぐ。杉こへこのうん情
しぞー牧師こ祝阪玄重工音
イヨウお若さん方を呼お教さわる幕で
ぐざねまをのゐ何を

ろくく ゆるんでござります〳〵 孫へ十二今おしめ用がゆるのでお
ざりませうよ 〳〵 ろく 私ゆるく 孫ト海きげんあしくしい 者へ
ヲヤこゝろんやでござりまふ〳〵 孫へヲホ〳〵ちよんとまりお 嬢
さまひさんの兄をだせよどうもく 去へ
玉嬢の菓でもかるんでござりませうよ 山葵ぼ
をおろし放玉宝でござりませうよ 孫へアレサ
菓子おいてく 玉スのじやおりませんよお前
さんの兄う血のぼの門番をいくく中へ

さま〳〵ヲヤく〳〵ろんや孫へ
ろくで八代目の ぼ猫ゆく去へ
ゆるんでござりまふ 工へン ト孫へうんのくぐ
おれろ玉虫 〳〵ひさん猫ゆくお邪ござ 〳〵ナニ私
やアおなさんとゆ娘をおかまいのぐござせく
やをぐ孫れ〳〵ヲまゝ如ヲ〳〵ろ孫ろのござまくゆ
てむくをまゝ娘ぐくろひさんお出なさいト二人りの孫
のをろ引サア孫驚でおござりますよト三人ひく

くだ〳〵〳〵敷るう傍てしまひ
島を切〳〵ひろひ
（一度四海の下の者のよふにしく合せえう申ブー）

笹七古酌

その酒お好そうお客ふ何ひ。声をそろへく告るゆう。
何しやう名酒さふ。菜屋の外よう寂つぶお腹ふ
し娘こそ。ふゝゝゝ。牛らしいをそへ
てまう一房二房ん変う。なぐ〳〵ちくる善ぶ
ふ。お菜ず疲を新しい今の
（猪ぎしちゝゝゝを

国承して〳〵ゑ給りの狐でござゐまをうぎ嬢ふ
お出う成ふおこゝゝのぐざゐまんょりんことのをと
ふ在まして紀の勘蔵をうそてゐまをせうこそ
うをでもあまう私ず例ふ在ぎまし
まをせうと話ぐまして上乙さうん小紀をまうして嬢方
を愛へお連申しまうさのぐざゐまんョまうア何ふ紀
しそも若ふ私ず房でうをあくふ
びのう宮ぎゐまう今まう

何とやらしてもやあのへのお月さまねまんぜんごろごろやあんでござりまんせうら
ら焼けござります旅まんぜんが何と御合の
うち名でも切のお金のおくもの文おもてりの出
ておきう粧なせばそもそもそのりう月のうち名の疫病ごと
まんなかりまき嫁もさそおお娘しうおざりまそうへ
ヨヤくあのお粧は旅さのぶお茶さんとやうへまかと
やうへんもうそうでござりまんぜんが何お茶おづうう

をおうでへ有嫁そふごやアあんうれへ〳〵のそこ程
あれお前の弱虫てござりまんぜんのよう金体嫁ご
まうううそこそ在ましお出と旅さくおもうと
弱をうううそお粧をうおづをしし悔性でござりまんと
ども〳〵どうしてそ夜おてが云ふまうねそこで
おってもれやア強気のうう女の妻でござうお
ねそふそこそ不聞おのまんの悪魔そ
のそお内のそこんふ

うお庵の方うづ立寄をしていくさのでぶ
ざねまのせうぶ死そんぐくもあ入てうらや葬此をおこん
清ト〻まうのふぐくもあの娘をりかとおんあんや
うでぶざねまうがサトてあんぐくお物をおその例ふ
て。若ふ始孫のそるしをぼくふ。そおお菜ってを
由ふ多ぶ。口焼し娘あうろが。お中ぐくた笑ぎうう
しうぶ。ぐうしさ祝中ふ解らふぐ。房二年この源
山中ふ藤くふ鳴ふぼつるを。今ふう男ふんが無う。

駕おづうをあくべそ多そいうあくんぷろ家
ふけべそんお中を。推量てるを良をこのよくく初へヨやく
そんぐやさあのお娘かお菜さうへさくまうをうして此方のお家へ集りくのでまざる
ませう極へ全体実はは別荘のうちをやんぐくく
在そく房さんふ含ふとうふくく集ちさのぐおぐざ
ねませうう解うません極へまう何ふんくせお杉
ざんのおえのくふり彼方おあんぐ。おくくードのさや

由兵衛

おうめ

それでお嬢さまをやんわりと
まん福へとおもそさのこうれしき物へだが。お家さん
の方お家まへうら悲しい
病を發をもおぶくひまん私しやうくも
生てをねうまいませんと
くえまんとお光さんが私も
もお傍のまぐうまいませんハれへんのかの方
いたそうまんすたうくお在

お家和のも涙がおざるまうん先が先ゆう
ひ方のお小志ゐでいけりまよう
ひまんおんぶをゆ絞が色々扁
うしくをも家をそうる訴ぐおうまる
くしやゝおざるまうもぶうてまも虚病
うまうもやゝおまいませんまねお
やさまいませんよ実ふ又お家さんが勉強づく
うう面が悩うおざるまでの悩るのや

うみ由蔵ぐらでゆうあるまじてそ死ん
でくもおまんまんぞろふ
男小夏らをてそ私あらば死ぐ
ふしうふ生てゐまんもけ
ゐてそくしんぐおまんまんせうひまんくん
ざぐねまんりふ手紙あまつ
ろしを遣べきとまんもくしんそ
逃しふやうは指はやうが紙つんまんの日ろの川

の清姫のやうお放まして死く悪敬てきろうと
つえまんろうもおまんせんとろうしく私分
ろう分が懼しんぐそひまんふ放まんの
がゆるもおでざねまんふ分のうくふはまつ
とくお菜のまろう仏像おい。自然と歩る画懐
も。紙分お香の分の為めくさてもお菜私うまき
つき。養育がうさくふうお祈い。嫉妬を七去ま
一寸みくくそうふ屋きいは為とぶんをお

ほくしようりよく〳〵在りけるにぞ。偏に深念し
つゝやうおれがお菊を忌嫌ふは。さうが弟を思ふ信実
なれば。その言ふに怖るさきかうなきとおもふにもあらず
弟を思ふにまかして。さぞそ死なば恨をもらん。お菊の
作りもくらく添へども。既に是両女和合してかの人に
冊うげ。室に娯しきてなりんし。最殊務なる其にくらん
とおもうてお家の手業に。いよ〳〵深念を浅め
ふんなのよしを文に認しども〳〵も彼さぞゝとて

祝ひの饗をお松にも。お梅にもうちわけて。品よき体に
金銀まで取らせ。一間を立出て。嘉又三人しても。菜
室にてお家は手にふれども。ささうねさまのに狂言をせん為
してねるかどに。房二郎は由ある事に。そこの場を拝
しぬく出て来ん。子を見てれつ何とやら。さつそたの
きん流なるを拾へしてお宮の側へ出居ける〽ヲヤも
うおゆんだんのならぬ宜のぐおさんまだ〽トうろうろしながら
たへつゝあんいもおもひね
与みるく彦〽アゝうら清濁としてそんなんに快さゝくらも

ちくれ　かくくろくろ　トおれのねへ　金
性ふおろん　ろ　まくくろ　移
ふ。おろろくろ白服で　きゃくふか。
ろく　器気の　婦くろ。年　婚ぐ
まくろ由ろゆへ。お業をかくくろ
お杉を　行　教へまねぎ由へ　今の仕宣を　きくその田　なの
もろもろ乙ぐ引くろけて切もろろ　家へ　くく
も　ふトロぐそをくて　縁もろろも。お宝　お　杉の中

ふまぎろて。粗忽をそるそ　お　の変
新　ふ。粗忽ろも　ろ　見物の　物が。ふく　乙
ろ　礼　ふ。変　粗一ッぺん
変　を　ふろくく。翼　ろ　紀乙の物
裏ふ。粗忽　連　一　辞　くくて。
由ろ　ふ　房　平の。ろ　労を　ろ
くろくろふで。お宝くて　ふ　森ろく。庵桐を　奴
婢ふ。ろ　の　内　ろ　ろぐくろ　働き。　ろ　ぐ

つけびの松もなくおまつごと
築地の父を行脊て。釜成
まをまねく面色かへて。ぷりくしてもも
あるくくとんでくく強ぎまでえぐの梅〳〵
ざぐるまもせん由〳〵熟ろ眠くくの
まくのやうにおくくのぐろう梅〳〵イ・エ下光の
音でも上めが高痛で歩もも中よりーおをあくまもれん
ら宮おまくくおくぐるまんの由〳〵ハアそりや又何形

くく梅〳〵ありがぐう上めおくく仏法なさんまくト
ひくも重やうくまく要。
婆い風のある社。碑けくもちをふるべー

○もちひくでこう分の　作者名前
　　歌澤小雅・

春色連理乃梅巻之十三了

春色連理梅巻之十四

江戸　笠井七歯　梅暮里谷峩作

お梶の法歌をうたひて由之助へ送り〳〵ヲヤ法のうどん
〳〵このぐ又府の出ろ風ら〳〵さよ〳〵ハイ私しやア
どうも困ることもまぐ〳〵ねまるヒヨトあなたの策中
をふり出して居〳〵ヲヤ法由之助へ合点ぢやアねへ
ぜ由之助が解

らる〳〵何が扨ぐそんなら
そんぐ〳〵こりゃ〳〵ろうそくをのぞき
こびろ〳〵ろうそくをのぞき
まゝもれ由〳〵おんらがぐ〳〵
私が山極方をもつくお恨
ろ〳〵ろ〳〵せうが気もぐ〳〵
気ぐ〳〵皆お歌〳〵
又何ろひ出〳〵
扨〳〵ろいみるの娘のお徳

扨〳〵ろいみるの娘のお徳
ろ〳〵ろ〳〵せうが気もぐ〳〵
気ぐ〳〵皆お歌〳〵
又何ろひ出〳〵
扨〳〵ろいみるの娘のお徳
ろ〳〵ろ〳〵せうが気もぐ〳〵
気ぐ〳〵皆お歌〳〵
又何ろひ出〳〵
扨〳〵ろいみるの娘のお徳

扨〳〵ろいみるの娘のお徳
ろ〳〵ろ〳〵せうが気もぐ〳〵
気ぐ〳〵皆お歌〳〵
又何ろひ出〳〵
扨〳〵ろいみるの娘のお徳

冊ろそおまへる志ろくみるぐやア扨へろ文
をふ家ろ家をろ〳〵ろくみるのも親おま
へを例へ重てくろのてョとそいふまろ
まぐ〳〵那〳〵くれたまろ扨へろ爰も爺も
家へ冊ろくおまへ意家ろ〳〵
爰〳〵しろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵
んざろまろ扨へが恨を結ちやアろまろ扨へせ
扨へそ極お出結切がお在ろ放まろあろべせ

お爰さんを參理ふねんなてふ伝ふ
のぐぐぎざまをへ由へてぐやてのてこのてこ
先刻の一条を立笑
てこ伝ふやてやお爰ツラ論ぐぐぐぐ
てある唐の通情のお爰さんざアお抜へ
そもてもありまてヨ由へ總ろ雅ぐぐ物へ
おわざんてぐ笑まし
お雪をみも嫌てぐぐぐ

かゞ待くら巾よ由へ斜してねるゝゝ呆く化粧孫
へ女婿へろそ色ごろても卜何中でお梅を耳まで
赤くして茶巾を縫る音ジウ。グチヤりく ○ 般方
の一室に若夫婦あり。好くお松が汁ひなく土器の
二階の長様より出しく来つる絹布の夜具。枕元
にあ櫃炭火を拵くに鉄瓶をかける茶好に
さし紙火鉢に。煙盆と染角の湯のみを添おき。
利休好の行燈ある。鋳物の茶器の燈心を葬り先

にく懐直の運手媚へ。流婚をさくく側へ座
まゞくに。弟身ぬ身気ありく引くぐき。屏風紙
ぐるりく立出しれへ出機嫌よろり卜出く引。何とへ雨
纏がさし向ひ。枕ありぐく顔と顔お雪やおんし覚ひ
切り舞に。房二郎の面を見つめ見るゲう。濡紙
吞とく聲をひそ免く へ兄さんお花さんい私
と一生夫婦になお嫁なるくるて与市ま及お
ぼしやしでおざゐまんく 房へ なんぐく今秋

おうぎやく異名てんぐ狩
うら形板くうふを芒白髪くおもしろくある
ヨ私トきいてをいもうれをへ実正おそのおぼしめし
あうら是まぐの通うぐをお菓さんとも中よく
しそのげくらまーあトいものおれがいとだく房へ何
をいふうくおつぐつまらあ山那方のくすあうだり
けしくあふ愈おさんおー一点おだうぐざうろさん
おそうふ拿まぐれ紙を皆さくげのそう

つりおひかくうくそ紙でおく
ぐうう是うくいもうお円是一点おだうぐざうろさん
世覚聴して居をへおくそのおんもを踏しうぐ
おそうくねお菓さんとうくあうおぐ
お在ござまーくうお菓ちやそうしおこまお海
あれるやぐおぐおまーくうお遠今ふ板くおひそ恵づ
うーをお板さいてい居うぐくうおまうよそれお私の方へ
お生ござまーてくうのちうをおお推ござまーてくもお私が

御ぜう様御姉妹かたうわさ
まをしう何事ともまうでのか
給ひて又上〻御上の方へ
うち當りてお兼さん御姉
おありまして中よく
御ちゝでも私を可愛
うち〳〵お在あさまう
お前のやうお兼私も

男「さうぢや那女の血紀傳さへ私もこんなの書は俺捌
かもと いつもくけんそうをさうとひきさいて私ておまくへの
駆ぐるおそろまん 是おまへ
おをいうる動靜をそく。是なとだろう 駆るくまでお。男
のんが宝うるい。姫〳〵も 恐ろ〳〵。ひ方が私くまを
お業の方も。怠生そるんうう計らとびん。まうう宜う
うふと。除念ふ除る悦際をぎ 尊い。世るそうぢの源恵育
もをるも そび男の私を。おうとえは見くお在やどお

男「帝う帝をを製〳〵紀傳を。又ぢくふ製ひと危め
ゆ〳〵て歯つぶし〳〵「ア」私を娘喜とやや去
まい私へ〳〵「ト」いひうう違れ「ア」なをぶとぶきうもる
あうそんぶんをさうそ「ア」私ぶ梅角
又るるもおもるの隣く
私は話を製拾ぶ悪く〳〵ことやて皆ぶそ叶ま
せんい方へ〳〵こんとぶ一晩寝るし
製ぶ仰向おきまうくふ紀傳を。
うて答るぶ宜を〳〵そ私お「ア」方へ〳〵ぶ

止そふよりみつこうの旅のこゝろを申こゝろ何
かくせべ。義が男の顔へ泥
をぴ。そうまく樓違の娘を
男共八歯
都てお雪いそ行なる。霧ふ兄由こ助ふきのふゆうし
お業の一条を。お松くうゆひしも。房二郎ふかう
くゆうひしゅ。房二郎へまろぐ〳〵と法んして乾情を破
う〳〵一位一件をり行なうくば。

孫を絆ふぐこ人レが。噴て申ようく善し家と。その引の
ふふ首をそふ。お伝ふ乃ぶゆで。由こ和ふきふよ
ろこび。お雪の真んを感ー僕て。そ行分もお業のゆ
お就てそ。ん配せ〳〵よー。ふふ房二郎
が兎おづゝい。狂言くしお松が
清をやうゝも。お雪ふんをそうんく。ふよ
ての座るあるぐゝ。郎てのふ我くふんいい
ゆくぐらんこふ返ふお業を行ひ。絡和行動静

をつくろう名ゆく。第一番に用意周全をしてきるづゝものよ
し。爰に希ノ作へ兄嫁の信切をまつゝ
ど云てお仙を渡しあるくらん。ト今根真ノ兄嫁が。富佐定
そくく迎に来るところあるゝが。お梅
を拳何ぞ。こうろんと船より一足も来ざるゝべ。
お雪いかんと思ゝ小婢を走りやりて
ふ。使のもどらぬ先へ来て「ヲヤ今よりまんとお待ちなさ
けれどもどうぞおぢねまんしょもうくどん

あふ気嫌なお方ノ来て居まして御何でござねまん
ともづゝくゝをやて就而さんがお留ゝ困ゝく
お在あるんまでもうくお兄さんとゝ
をしノ旅のくさぐねまでもうさのゝト由へ
ゐる処の家内へふそぐまゝ座口ようゝ立出ゝお梅の伯母
の露口ようゝ程の動静をうかゞひ。商人体の男ゝ立
しそくおよう悪信しゐる利ゝし
話へコウ那話ぐしいやゝみるつゞが急へせん立出娘も

なのはおごろどや小ごんだろうしく宮をしてゐるが どん那
でも出来くのごろつが荒れはごろの由こゝろよりそれなりしこゝろ
よーんで旦那ダ角くゝ和ダ奥家務なお気へくちをせうそを
もろくゝるゝ如トやァ元村のて十一両三分二朱とゝいよ
金の工面ハ芝え朱そふも物へそ是を今借ろくみとゝい
ろくゝ組ダ此兵尾ハ何とうでも出来兎へろくせう
しく約束どふり金のうくゝハのゝざ
已のまゝ理をゆる兎へ此時云そでおゝ姫を預ろくゝみのゝざ
ゐまする

お物をまゐつりお物抱へそ是をでうゐをとうくゝるうり
遠姫いまゝ宅ハ抱ハ形いろきくゝおぐざゐまして
で狐のまもふだろうり存まして一向まぐ小児で
おぐざゐまんろう化さんのはゝ中へ出ーまして何ハ
もお役ハ立を殺しまゝ
通りの私ダろくゝ病気でおぐざゐまして私のゝ
脚ダ切を殺してをうまして
まゝくゝ皆角ろるとも物ひません

ねる間も猶ざる小供衆でさへ
ふがそれをば
もおろーまりぐざぐねまうをがお病を案若の中
でも強分者お看病をしてゐまーして昌ん風病も
全快いくまーてヤレ嬉ーやれ
おはでかおまうまーさ悴がそれうとヤースりの
を庭が招病しまうまーてお自由が聴がほうくまをんや
大勢みも私が煩ひまーてもう陽をいろう酒でもらよ

もおぢおませねんをお薬ーと飲てう
さへ泣ようね活ー
でも猶くそれどや何う娘い波さをしたら
とびい今で倩衆方が出方い物くさ
物くうぐらぬくトヨぢ声おりみ
もそれまんうお報ふうおの妙ぐうう
こんやかうぐまうー術をこう昌の妙ぐうう
何ともく猶くどーてもお代ん

ゐそもぞい　かゝる（モシ）
とかうでござります　ゑゝ堀ゆゑ
まごゝろが　ござりませんゆゑ
のそ志ござるヲヨ郷をしくさ
ざり　理ゆゑ　ござる
もし己達の　せわ
きうやアゐ　ドひ
お前さも　ゐのるぐ
ゐ

分ゐるゝ　ゐ
出来ぞ　娘を
ゐぐ　ぐ
ゐぐ　女ゐ
ゐそ
ゐでも　ゐる
ござ
ゐ
もきう
ゐ

さんまいごくうくんの山上のお姫さまへ
かくかくお給ちかまさるとび先刻おおさるーやくそう
はるやお就まして先達ても玉川屋様おそくの方へお使
おまうまして商人やかもおまし
ござまうしやりでおざるまうしてとうく玄関
利分の儘ざりも乗入まして
そもうおひざ商もなく、おそくちかいつまでも
が賢く来るもさうりけだろうくしんサアきうくと

物へう始おまうしへ歩こそおまうしの
そうおまうしまくまくがいくとおまうしの
まうくお腰掛ばうくお姫さまへ御
うち御ばくおまうしおさびそうそうと
懇使ばくおふうくをと。
みさんとお薬の件。推量して
しけるおまうしへ。せんそ。つまうし釈ふ外
薬。小僧を今ゆくゆ。お物をば

玉なくなりぬ。お家のうれまつぐ花俥。そも
のこゝろざしの。誠は細川候の分の上なるめで度
思ひて十万両の金子を。惜しげもなく投ひを
なさるゝ御仁のやうに。なりくべきの花笹
用ある。此方の者へおもむきを生悟作りて出先も
走らせ。その報ふがさしづをうしろ姿を眺
ひぐらし。今宵とて自身こゝへ八。

宅の番頭申ふ面ふもあり。ゆふべ
多代娘五六人の使者を引連て出る事の無駄なり。併
事ながらこゝへ立よりてきのふより止宿する。
お客座敷を明ひかんとて待つるまで。
お物のうまい食ふをしてゆるりて薬よ薬ふよりも
当国ぐらぐらと
書を読経社物書く十四

春色連理梅　巻之十五

江戸　梅暮里谷峨作

第廿九齣

四ツ吉かゆるとしのよ。織ぶ判断等のおもとべて憂
みるしゆえが。後よろこびのかるも結ふて。くる等ト
塞翁がうまんわ佐か成てかり。彼活六ふ倭ふ五て。
お梅殿ふが面影忘らせんとやふとらへ
忙ぬしの下女が門口よりお梅さんと若旦那

さまが一寸お出なされまし〳〵と挨拶へハイ〳〵コウ已ア
そのく迂闊しちやァおらを忘へせ気づかひ又ゆうが
けの万国院店から鍋川町行方を五六軒尋ねく
あけりやァあらう私ァ走つて歩行みらへモン
お女中へは娘いらう私が
も宜うをやせんト女いらかきれてこゞべもおし
ませうが扨をさ勿うのお人でおざあろうう
其の方へお連あさんまたあらう程のて一寸あと

まうをお宜うと挨拶もそこ〳〵に駕籠へ乗
ら何卒ちとお待なすつて下まし〳〵トいそ〳〵て湯屋
お婦へいそ〳〵と由ふ助のもとへ
今し〳〵五ツ半さがあんあるや先ホ何故
お清をうけて居るのぐ彫ふさし
ひくくくらと仕やうがあるいろ
角も掛合せくそこそこ
でも何家へ駆けく金を借くて来ておも

つく松りの洋へ行てうそをび生屋留やるぐしぐう
してぎうくとゐ善ふ仁をてあるゑへまゝ森びゐ
悟よくか俗がおる多くうう思てゐまきくゝ
そるゐしふそゐ幸重の俊侵の寿延の全を指
て行ちゑかさところがおお名ゝ権家ゝ法薬式
でおどり出ゆくお伯ゝ指さんゐも俗おも多
うくふようくきまゝ指ゝてゆくてまくことゝゐくうう
ちかくて行おまく連祝ふのそるゐしをして原来

俗養の全のそぐそうてさしく留つく郎照を踏
あくんをゆけくぎうてよ
てそをぐけの全を細へまくうそゐくうさ
うう是を指くゝ麻ゐしてゐそひ指く
ゐんぐ指ゝ岩ぐゐくうそゐくうて指う
面ゝ悟ゐ好ぐゐ毎
指くそのゑをゝ好のゝ横面へおき負て岩ぐゐう

いえ〳〵まゐいゝ高まぐそをさ〳〵
と男ぢ信切者がくみやう娘〳〵山くまで、鉢迎いされぬ急場の金そのまゝ載き
とゞく。縄のようを取かへて。縄六
そうも驚き。事かおまいまつ〳〵元利そろ〳〵て
一ぶの。ふくも高く馬鹿かい一言半句のえぐさなく。
ちぶく修文をとり出して。手形をきりぬき。母親
かへ〳〵やれ〳〵ひを松〳〵金を借とりて

うて〳〵どうも気ざくの已ざりて縄かゝ悪性をして
帯をはきて安も後〳〵ぐ驚ると
ぐそも出〳〵金ぶ〳〵気ぶかして高慢と
悔金の完を娘の完で埋ようよみうけ
き縄の切ようよう娘をかへる支度
何してもおっ伸ア安んざの娘の汁が吸ふるうう鄒
をとゝのもなぶ気〳〵絢爛が遠〳〵る。藝場
まぎれの客をに悪性を。客流しふして

えくらゐ。お祝紀ゐい由こ
びまぐ何ゐをさう 描てもの。お礼ゐまうふ。画網
の運び方をゆ上て画ゐびゐふ。
ゆぐて由ふ画こ其物よも写ゐ婦し漁をこぐ。
むぐろう礼を述べく。同つぎ後の男のへ形
運の画いくゆ上ふゐいゆまゐお筆のをびてくぐ
さいまへお祝がまぐ和雅ふちまゆ礼をまし
さゆへ投ゐくく娘を連くく男ゐひとつゆる家へ

再婚ゐまうまして お祝を先のゐの娘ゐへまして
画倣ゐるぐこを招そぐ
その支ゐ病死致へまして
が筆ゐも掛ゐまも紛ゐ
筆持ゐ変ゐ漁ぐ
甘ゆぐ右掛ゐ放まうて
筆筆使のゐる時でゐ
重まへて、 驚へ

お秋の図

ほくろの図
お梅
筆日枯れ
ふゆくさ
おそつぐれ
十時ごろ
つくも梅

で御座りよう稲毛屋(いなげや)へ祝(いわ)ひまする小
賞(ほめ)れまするのでござりまする
後(のち)に商(あきな)ひ始(はじめ)まするござ
ふ祝(いわ)ふの御(ご)ざりまする
やうふ雲(くも)の様(よう)まするござ
ざりまするまするでおざりまする
がおざりまするもござりまする
そのう命(いのち)で存(ぞん)まする

四十三でおざりまする
ありと名(な)乗(のり)ひお祝(いわ)ひ
まして御(ご)飯(はん)を
まするう嬉(うれ)ひまするのきう
在(あ)まする由(よし)の事(こと)を吾倘(わがこと)同年(どしどし)ざが何(なん)
ん和(わ)ふ方(かた)のござりまする何月(なんがつ)
去年(きょねん)二月十日の出生(しゅっしょう)
のが実父(じっぷ)の多助(たすけ)ござりまする

下し別判が押ておぐるねまちょへそ後下田こ亜の
如就ては、ひひり奉願まりりよう。そ之外の綺常
色を出ーてんとるを看目べし文政二年十月出生女子
よりりお栃の無へ之へへのるをおを風としてく慌しく。
ろが家へもぐうて筈よう。綺常色を食出し候忙しく
お来つ。是彼もお国元へ文ぐみ河免れ
て。同じ年月を待ーる。そ表色を知げ上べ。程ふ押
る下形の。字家亀も遠ふてーる。亦呂一対の別判を

会ーてえ上べ男つる下章の一面一歌の婦妹申ー風の如へそん
あうそるるこが孫の妹お栃の無へつのるさい婦さん由ー風の如へ名
聞ふえぐう両人へ無ーこ之ふそう考て。
妹ーー風を掛ひる。後所せー兄妹ふれもふ聞ふ
奇過を。上るき上銀ひ。お栃を吸でうーを吉上べ。
是いくとぐう悦ひ雪ふ。婢児如供ふ通るまで。
祝ひぐえくるぐふ。銀ふ酒落を個へ婦妹。姉如妹。
経文の。要を巡ぐーて。一家のようをつぐろ。

由こゝ御ぶ母祝の。父母の曇ふ招りて。遂拍子。家醫
うれび。急く兄弟名のり合也。まつおとうを告く。何
とよ〜あふ汁べ〜。とお招祝子を願ふつく。お招子の弟
の侍ふ門連ふ書を庭ふ帝を使ひ御りぬ

○ 扨いやふまつ物とでも。生まりとれい異人を悟しく
祝と〜掩てうく人の。見物。幼
もる志る。日本武尊ふ双児ふ先へ生とつ甲ひし〜生。
大雁と号し。湯ふ生まれ〜ふ雁い号

号りて。智男ふ昔ふ甲ひ〜て双なく。武振武甲祝
を身年らげ去切を養ひ〜甲ひ。驚ひし〜。神怨
天皇ふ〜猛せうふ立てうまひ。陵ふ入るきうの皇帝のおんふ
う。陵土中ふ。服を祝申ふ男の孫のう。葬の警莊ふ
小女の孫のう陵霊猿軍ふ男の孫のう。雙の吉文
重動ふ男女祝孫のう。名うふ墨言つ。ふ王假
大良のうその宅祝漢ふ招拳〜うふ
返のう。うまひ。孫を祝〜う一座やて

二ツを入るゝ是楊枝を挿しのみ後

第三十齣

葉や今朝もちの屋の暖簾。花の色香の都ぢら私どもゝ客もき〳〵香の人情と。指し込を無のこゝろお後らを

お菓子ものかゝるきの入縁台ようゆり来てうも忘せまく

くみまぐ。ひるもせで食うのもせざとび。毎いりん〳〵く

物安うふ。茶を薫ゝて楊の色〳〵おき出〳〵かゝるお菓お菓

ぐでき〳〵ヨどふぐ〳〵ゝ。い情うのきく〳〵ハイろぐ〳〵う〳〵ナ二

ゑ〳〵病気でもかりまふ

まく〳〵さんぐ出ひでもう加ぐ

ぐ〳〵お後前ぐがおまく〳〵屋さんのうぐ加ぎうふ加て有然

ぐ〳〵病者が香ゝそ手ぐ毎ふ像ゝそどゝもかう急

それいゝう書〳〵ゝるんでそ加ぐ何ても香いおきく

おゝふと指ぐ〳〵ストゝきそ男〳〵ハイぐそんとゝ加ト

ハ〳〵ヨヤきそいい先ゝ狸ふ由〳〵イヤもそふ

〳〵く加ア加そいゝ楽〳〵ぐのうきヨヤおきく〳〵

い寝くらく、ハイ医師（いし）の方（かた）へお報（しら）
言（げん）ふ暮（くら）しまして、ねトりひみつをきく
そのゆへ若旦那（わかだんな）が病気（びょうき）ご由（ゆへ）へ、アレは母（かゝ）さん
その由（ゆへ）病中（びょうちう）由（ゆへ）へいくおきくさんまゝ母（かゝ）さんお伺（うかゞ）も
願（ねが）ひをせうくきく（イヽえ由（ゆへ）へそれでハヤ入（はい）ぞん
そぐゞトきのめのうをうつくしくきをそうつふしてゐる
ゆへ由（ゆへ）へ方（かた）々（〴〵）のうけごぶ
うつくおきくさんが病（やまひ）を起（おこ）してゐるのそ
おぐゞおきくさんお事（こと）へ何（なん）ぞ事（こと）のあるまゝ〳〵ぶ

房（ぼう）さんのきのめの口上（こうじやう）いくしやヤ私（わたし）が病（やまひ）由（ゆへ）
ゑ吾儕（わたし）もあ
ゑうくぐり〳〵房（ぼう）さんぐ
ゑ悪（あく）づらをうくこうとくまゝ私（わたし）
おんをはさくく解（とく）
おぐゝ私（わたし）がおきてゐまく
んしてお在所（ありか）の子着（こちやく）
おうぐんかしをきく〳〵
ゑ私（わたし）ヤ宅（うち）へ

まゐせんでいやうまゐせん私へおシニ有ざくいやーでござね
まうぐそんな私おお孃さんおはんの配をかをやをしてのこのお
どうも願ますせん私へきくへ出る君方のおゆるしやーの配んでも
ござねまうぐ嬉しうござりまうぐそんなをろふ
能てきたお孃さまへ幣して旁さんとそろそろ帰て参ませう
せんでいや私の実親がをまりませんが私へ出ナニくと願させろ
らをくへそうは私ふん配をもろうなきくへそれでも
どうやろうんじんの為人が実さうもござねまうぜんい由へ

一

ますく実に悪うござりまうぐ私ふつゝ利害を解て参ちゃ私志
ろしうござんす肯ぬる時ん事ぐ〳〵柳うろ慌
しくへ帰る女由ゝ私しと会せ女へヲヤ来ぬへ由へ
そう旁さんの仮ウトいそれぐ双方のきくへお実さん
実の回私をそ私どものをを出そんじでいろくとご配ん
ろおくへござうの時ござうをそうを放でやてそも宜ヨ
ヲヤおれてござねまうぐへをもくへ安ん配ーまくへ
私ーやアのうござんお実ござんすヨ由へ

口よりくちまねをしてハイアヽ云ふく
かくりげの小出釣道さうし
おもようござるまゝてふ内こゝろの出を探え
よく成まして雪の降けてお酒とあさん
まゝ〳〵ゝ茶おいてまゝ〳〵ト何やうきしてござくいそけうとゝて
これまゝゝ由ド何と当てよこゝ〳〵ト
きのふのゝひもようをえらぶ

まゝ〳〵ト娘の事ゝ
十四ぢやる女が乗
みをとふせゝてゝ
ゝゝふもさ
おまごゝゝ堀
ゝうまぶ幸ひ
がゆゝゝぐる
ゝゝゝゝ

由ノフラどうぞ己の腎宝も盗まれそうに
心こそ甲斐がねるとお書と一ツお連て来るくして呉ろ。私へ毎さんおまくさんもぞっとも
おまんが物よ間違てお呉ろかとも思ふ申よ
顔の面倒をそくきたんぼへイヤのこよ
自分おまかせ申へ
投ーまして施金ふ
ドゆう投ーまして　あ

落さへお元禄らべ育がくふぞんどまる
どふふこまくゆく駕のわうは在宅て
を中をまるも所第ーこぎねまんが座さんの
ろとく中をまるとお薬がもふいって家中か騒
ますてまきへアレ口扱さんふうげんふら放ねまま
まくへアクヨ市ノ憩ひの眉をひくきる。お薬い
ふをくへ鋭びつ。俄か雀をかげ。盤を振り
ぐくう河籠をかくくる由ふ面をして

そもようう由こ命が多端世活あるく。お蓁称ふ
うぐ〳〵ふ。房ひ希の方へお蓁ようう。ふ上を
伯〳〵そもび。房二希もそぢもく。由こ助お雲の係切
をようそび。一日由こ命ふ連らもく。吏揮ひそふ
お蓁の洋へ芸く。ふうく。お雲が新ごふ房ご
ようう。百小業和き安ふ。ふうく暗そて
無統ふ。姉妹のでくふうう。なるふお雲ふお蓁。
房二希が。蓁こ蔵ふひ。巻ふ。ふうくる。

ようう。お牧ようう。ふ。
ふ。ふんふうこ収びそうしぐ
ふて。お雲をお蓁こ和合ふ。ふうく
の老を威ん。又お蓁を様ふ
さそくお雲を嫁ふ雲うしぐ。
お蓁祝娘を引ようそびそふ
のそび。旦那祝の安ん双方収びいそん於ふ。ふ
まくお称祝ふが。測らぐ無統ふうう。

ようう。お栃と申す事が由縁りの
くのをば申す事の為祝ふ栃の巻をみして
あるを。聞くに感じて嫁と仰しゃ由を聞かぬ家督を
譲りて。お栃のおをうやまひ給ふ孝行の別
而深く感じて。誉めやして。新木若名
もつ雑芽出度備るものぢ
勤八が年来の忠節稽古
なれば。旦那殿の御方の支配人。

お栃うを祝ふ為ふうを含ふ
勤ふも。若旅く。諸ふ
人ふも度を祝して。忠
うぢきを。官のお善悪をも
る。さるぞふお栃の婢如
お栃ふうさわぐ。綾宿
の宅招支配人の。名主お
くふおふ。お栃が男子を

お客(きゃく)の女子(おなご)を喜(よろこ)ばしが。何(なに)も取(とり)柄(え)なく閉口(へいこう)なよく和合(わごう)して。勤(つとめ)昌(さかえ)しく。

書肆 浪花心斎橋筋 梅暮里谷峨 板

口 銀亭 梅暮里玉峩 校
口 釣亭 梅暮里樂峩 正

玉